

氏 名	原 子 令 三 はら と れい ぞう
学位の種類	理 学 博 士
学位記番号	論 理 博 第 607 号
学位授与の日付	昭 和 53 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	The Mbuti As Hunters —A Study of Ecological Anthropology of The Mbuti Pygmies (I)— (狩猟者ムブティ・ムブティ・ピグミーの生態人類学的研究)
論文調査委員	(主査) 教 授 池 田 次 郎 教 授 川 那 部 浩 哉 教 授 河 合 雅 雄

論 文 内 容 の 要 旨

アフリカの熱帯降雨林の狩猟採集民ピグミー諸族については、今日までにいくつかの民族学的な研究成果が発表されているが、その狩猟採集活動を観察記載した生態人類学的な研究はほとんどなかった。申請者は、ザイール東部イトワリの森に住むムブティ・ピグミーの弓矢猟を営む人々と網猟を営む人々について1年間にわたる野外研究を進め、その狩猟活動の諸様相の記載と検討をおこなった。

まず、植生、動物相、季節変化を詳細に記述し、この環境のいくつかの本質的な特性を見いだした。この森は従来言われてきたような均一な構成をもつ森林ではなく、2種の主要構成樹種によって2地域に類別することができ、それぞれに弓矢猟と網猟を主生業とする人々が分布している。動物相は、2種の特産種によって特色づけられるが、霊長類とダイカー類が種数・個体数ともにきわだって多く、ムブティはいわゆる大型獣狩猟者ではなく、ダイカー・ハンターであることが指摘されている。また従来の説に反して、この森には明確な季節性があり、それに応じた年周期的な狩猟生活のリズムが認められることも示されている。

申請者は、今日の網猟がモタという集団弓矢猟を原型とし、バントゥーによって網がもたらされたのちに新たに形成されたものであるという考えを提出している。また、弓矢猟バンドと網猟バンドを問わず、ゾウ等を狙う槍猟の伝統があり、この技術の習得には見習い期間を必要とすることを述べている。これら狩猟活動の実態と捕獲量等についての量的な分析と各猟法間の比較がなされている。さらに、肉の分配の実態が分析され、一定のルールをもつ一次分配のあと、再分配によって結局はバンド内での一般的互酬性が守られていることが示されている。

以上の観察と分析にもとづいて、申請者がとくに立ち入って論じているのはつぎの二点で、それを本報告の主要な結論とした。(1)槍猟グループの中心が父系男性親族によって構成され継承されているという観察と、バンドの構成からすれば、それはTurnbullが言うところのテリトリアル・バンドとは著しく趣きを異にしたものである。(2)現在のムブティ・バンドの類型と、移動・変容の様式、テリトリーの

形態などを、農耕民との接触と鉄器・網などの導入といった歴史的過程によって復原することができる。

論文審査の結果の要旨

ムブティ・ピグミーについては、これまでに、Schebesta, Putnam, Turnbull らが優れた研究を発表してきたが、そのもっとも基本的な側面である狩猟活動については詳細な記述が欠けていた。申請者は、この問題についての綿密な記載と分析を試み、アフリカのトロピカル・フォレスト・ハンターについての基礎的な資料を提示したが、環境の特性をも含めてこの人々の生態に関する従来の観念を一新した業績は大きい。狩猟の道具とその材質、各狩猟法等についての綿密な記載と分析によって、アフリカの狩猟採集民の一典型であるフォレスト・ハンターの性格と特性を表現することに成功している。環境の分析、狩猟活動と獲物に関する量的分析結果と併せて、他の狩猟社会と比較する上での十分な資料が得られている。

環境、狩猟活動等の精細な分析を経ながら、ムブティ社会の本質の理解に迫ろうとし、そのバンドがユニニアルでないとする Turnbull らの考えとは対立するその父系的側面を画き出そうとしたが、それが Turnbull の言うテリトリアル・バンドとは著しく様相を異にするものだとし、真に呼吸の合ったもの同志の密接な協力を必要とする槍猟が父系親族間で継承されており、それがバンド統合の核をなしている事実を重視している。人類社会の起原と、バンドの原初的構造については、依然議論の多いところであるが、申請者が提示した共同猟と父系的統合との関係は、将来の研究の一つの新しい出発点ともなるであろう。

ムブティ・バンドの歴史的復原そのものも貴重な試みであるが、これによって今日のムブティ社会の多様性について統一的な理解を得ることができるという点も見逃すことのできない成果である。

参考論文4篇も、生態人類学的な研究成果をまとめたもので、申請者のこの分野に関する一貫した考え方を示しており、今日の人類学においてもっとも基礎的な部分の欠落を埋めようとする態度と努力を伺うことができる。

以上、申請者は、ムブティ・ピグミーの主生業である狩猟活動の分析を通じて、現存するもっとも原初的性格を残した社会についての克明な描写を全うし、いくつかの本質的な特性を抽出することに成功しており、この成果は高く評価されてよい。

よって、本論文は理学博士の学位論文として価値あるものと認める。